

『教育の時代』一九六三年九月（東洋館出版社）

## 教育における差別と区別

—能力別編成の方向—

矢口 新

—

人間の能力にちがいはあることは誰も知っている。それは教育を行なう場合に大きな条件となっていて、毎日毎日思い知らされている。能力が低いものがあつて、教育に困るなどということとはたえずわれわれの当面する題である。しかしもつと考えてみると、能力にちがいはあることは当たり前のものであつて、そのことの上に立つて教育を行なっているのである。能力にちがいはあるのは困るなどというのも一般的にはおかしい言い方である。むしろ同じ能力の人間を育てようと考へていることではないか。つまり最初から能力がちがうばかりでなく、教育もまた能力の様々にちがう人間を育てようとしているのではないか。そうでなくてはおかしいと思う。

このように見ると、教育の問題を考へる場合に、能力のちがいの問題は重要なポイントである。現代の教育はこの問題をどのように位置づけているのであろうか。

—

能力という言葉を使うと殆んど同時に頭に浮ぶのは能力別編成と

という言葉である。能力別編成という姿はすぐ頭にピンと来て、あれかと感ずるものがある。そこには能力についての現代教育のもっている考へ方が極めて象徴的に出ていってよからう。能力別編成について最も一般的な形式は、例えば数学の授業で、学級の中に成績のいいものとわるいものがあるから、これを二つ、ないし三つに分けてやったらどうかと考へるといったようなことである。現在の学級のつくり方は一般にはそういう風に能力によってわけるといふ考へ方をとっていない。小学校でも中、高校でも根底にあるのは、同じ年に生まれたものが学級をつくるというだけのことである。だから一つの学校に一学年が二百五十人居れば、五十人ずつの五クラスを編成する。その場合クラスを能力によって編成するなどという考へ方は普通のことでない。ランダムにするのが普通である。能力に関していえば五つの学級がほぼ同じようにというのが普通である。だから一つの学級に成績の上位から下位までが平均にばらまかれているのが普通の学級編成である。成績の上位のものだけで一クラス、下位のものだけで一クラスというような編成はとらないのである。これは現在の授業のあり方とも関係しているであろうし、小学校のような場合はとくに学級にそのような差別を設けることは、教師の側にも喜ばれないということがある。上等のクラス、下等のクラスなどという分け方になると学級を担任する教師も面白くないことになるうというわけである。しかしそういう普通の編成の仕方に対して、あえて能力別編成ということが言われるのはそれなりの理由があるのである。そこにまた現代の教育の考へ方も出て来ているのである。

能力別編成が考へられる場合の最も強い動機となっているものは、一口に言えば教育能率ということだと思ふ。それが実質的に何を意味するかは考へてみるとなかなかむずかしいが、具体的には、たとえば成績の上位のものと下位のものとのひらきが大きくなると、教師はこ

れを一クラスとして、つまり一つの集団として対することに困難を感じる。そこで二つに分けて、それぞれへの対し方をかえなくてはならぬというように感ずるのである。そこで、能力のほぼ同じものをあつめて、出来るだけ等質の集団をつくらうとする。ということは結局、上位の集団、下位の集団というように、或は一学級の中を分け、又は二学級の人数がある場合は、上、下の二つにして学級をちがった質の学級として編成しようとするのである。能力別編成といえは、大てい一学級の中を二、三のグループに分けるか、学級級ある場合は、それらの学級の間で等級を設けるかのどちらかである。これが現代の教育の方式の中での能力別編成である。

もう一つ能力別ということが考えられる時に出て来るのは教科の問題である。そして多くは数学、英語などの教科が多い。その他でも行なわれる場合もあるが、しかし体育、音楽、図工などといった場合は考えられないのが普通である。社会、理科なども考えられない方が多い。従って小学校の場合は、数学の時に、クラスを二、三のグループにわけて行なうといった場合が多い。中学校は教科担任であるからその教科に限って行なうといった場合が多く、高等学校もほぼ同様である。このことも日本の教育についての考え方を極めて象徴的に物語るものである。特に能力に不整一があることを問題にしなければならぬ。教科が英語や数学であるということは面白いことである。その他の教科に能力に不整一がないということではないであろうに、それが問題にならないのである。問題にならないのはまた理由があるのであろう。体育、音楽、図工などは能力にちがいがあることが当たり前という考え方が強いということである。しかしその教育の場合にそれが都合がわるいということにならない。その教育はそもそも個別に行なうという考え方があつて、また誰もが一定の水準までなどという考え方がない。それぞれが行く所まで行けばよいというような考え方が

強いのである。社会科や理科の教育では、学級の授業の際に、能力のちがいがよいことが余り目立たないし、またそれがあつても邪魔にならない。授業そのものは教師の活動を中心に行なわれ、児童生徒の活動はそれ程重要性をもたないからである。それに比べれば数学や英語は生徒のトレーニングの方に比較的重点がおかれるからそこで能力のちがいが目立つのである。そうして能力別の編成が考えられるに至るのである。つまり能力のちがいがありすぎると生徒の活動の一つのものとしてまとめることが出来ない。そこで、はじめにあげた理由である教育即ち授業の能率の問題がおこつて来る。同じレベルの生徒が一つの集団をつくっている方が都合がよいことになる。

### 三

さて能力別に編成して教育するということは、具体的にどういふことになるのだろうか。言いかえれば、教育する内容はちがうことになるのか、同じことをやるのか。しかし同じ教育をするということになると、低いクラスと高いクラスの二つに対して、大して方法がかわりもしないで、同じ程度の教育をするということが可能であろうか。或はその場合の方法に何か特別のちがいはあるのか。

こういう問題に対しては、これまであまりはつきりと考えられたことがないようだ。これまで日本の教育では、学習指導要領があつて、それが一つの基準だと考えられている。最低基準などという言い方をする人もあるから、その要求していることは、最低の能力の生徒にも到達することが望まれているとも考えられる。果たして最低基準であるかどうかはともかく、若し最低基準というような考え方をするならば、それは能力の低いものにも到達し得るといふ前提がなくてはならぬ。それは実証的なものがなくてはならぬ筈である。若しそうだとしたら、能力の高いものは、それよりもっと高い到達点に達することが出来る

る筈である。そこで最低基準をこえてどんどん先へ進んでもよいということになれば、能力別に分けて、教育の内容をかえることが意味がある。こういう考え方が現在能力別編成を行なう場にあるであろうか。

これはしかし現在の日本では考えられていないといった方が適切であろう。第一学習指導要領の基準というのが、そもそも最低であるかどうかはつきりしないのである。むしろ最高であるかも知れない。最高、最低といふのは、生徒の到達度の問題であろうが、そういう風に、学習指導要領の中味が生徒の問題としてはつきり考えられたことはないのである。それは教師の活動に対する要請なのである。口ではそう言われることがあっても、真にそういうものとして具体的に生徒の到達し得る点を明らかにしたのではない。ちゃんと一定の方法を講じて科学的に検討をへたものではない。その点では極めて大ざっぱなものである。だから最低とか最高などとかいうべきものではないのである。それにもかかわらずその基準性といったものは強く意識されている。実際にはそれは教師の側に対してである。そうすると教師は、指導要領にきめられただけのことをやらなくてはならぬと感ずる。それは極めて強いから、たとえ能力別の学級が出来ても、高い学級に対しては、低い学級に対しても同じように教えなくてはならぬと感ずるのである。そういうわくがあれば能力別学級に分けることは、果たしてそれだけの意味があるであろうか。

生徒の能力がちがっているのに教育する内容がちがわず、しかも方法も大してちがわないとすると、一体そこにはどういうちがいがあるのであるか。不思議な魔術でもなければ能力のちがったものと同じ方法で、同じ時間に同じ内容のことを教育出来る筈はないではないか。能力別編成の場合に、そういうことを質問しても、はつきりした答を得ることがないのである。実際に教育しない内容があるのでないか

と質問するとそんなことはないという。どうしてそういうことが可能なのかと聞くと、能力の同じものだから教育の能率があがるのだという。それなら、しばらく能力別に教育すると、みな一緒に教育出来るようになるのかと聞くと、なかなかそうは行かないという。誠に奇妙な話である。どこかにごまかしがあるにちがいない。

現在の教育は、同じ年に生まれたものが、同じ学級に入つて、一斉に授業をし、一斉に同じことを学んで、歩調を揃えて一斉に校門を出て行く、分列行進のようなものである。そういうのが教育だと考えているから、隊列からおくれている者があつては都合が悪いことになる。一定の基準のことを教育し、勉強したことになるが都合が悪いのである。そういうことはあり得ないと思われのだが、そんな当たり前のことも、教育の世界では通用しないのである。これはおくれるばかりが悪いのではなく、一人で先へ進んで行く者があつてもまた具合がわるいのである。みんな一緒に行かなくてはならないということになっているのである。

それではみんな一緒に行くということが、それ程厳密に考えられているかという点、そうでもないこともある。事実みんな一緒に進んだといつても、生徒の力には差があることは余りにはつきりしている。なかには殆んど力がついていないと思われれる生徒もいることもよく知っている。しかしそれでも一斉に卒業して行くのである。その点ではすこしも、一緒に進んでいるわけでもない。それも仕方がないということになる。仕方がないのなら問題にすることはないかという点、そうでもないから能力別などという点を問題にするのであろう。こゝう見て来ると何が何だかわからなくなる。

しかしそれでも次第に明らかになって来たことがある。一斉に進むということとは、大原則であるという点は確かである。それはしかし教師が進むのに歩を合わせるといふことである。あくまで教師の歩み

が基準なのである。生徒はそれに合わせるという形式は絶対にとらなくてはならぬけれども、実質はあまり問題にしない。実質的に力がなくとも問題にはならない。同時に実質的に力があっても、それも尊重はされない。先へ進むことは形式にはずれるのである。

ただこの場合、教師の歩みをとどめさせるようなことが起こると、生徒の能力別編成ということが考えられる。一斉に授業をしようにも、生徒が動かないと教師の方が不便を感じる。しかし能力の低いものを別にし、高いものを別にしても、その両者の歩調はまた一緒にしなければならぬという形式主義がある。そんなことは出来る筈がないにもかかわらず、表むきはやはりそうなのである。基準としてきめられていることは、高い能力のグループも低い能力のグループも同じように行なわれなければならないことになっている。そこにはゴマカシがあるがそれは何年か立てばみんな学校を卒業して行くということと同じで、ゴマカシとは考えられない。

能力別編成が本当にものにならないのは、やはり本ものでないからであろう。ゴマカシがあるからである。しかしそれはゴマカシと意識されない考え方の甘さである。そしてごまかしと意識されないということは、言いかえれば自覚症状がないということである。それだけ根が深いということである。全体としての教育の考え方に甘さがあるのである。

#### 四

この考え方の甘さの根本は学級を編成して教育するということと、一斉に授業をするということと、もう一つ生徒が一斉に進むということとの三つのことがはっきり区別して考えられていないということである。三つのちがったことがなんとなく漠然とむすびついているのである。それどころか、三つのことが同じことの三つの面だ、位に考

えられているといつてよい。この三つはまるつきりちがったことだ。どんなことをどんな風にやっても学級の五十人の生徒がおなじように進むということはあり得ない。生徒は一人一人みなちがっているのである。ちがっているのが当たり前で、同じだと考えるのはおかしいのである。五十人の子供を二人ずつ組合わせて百米を走らせてみるとよい。どの組でも二人が同時につくということはない。必ずちがいが出る。一人一人がちがっているというのはそういうものである。もう一つちがいがあがる点は、競争の百米の場合は同じ方向に向かって走るのであるが、教育の場合は方向もまた無限だと考えるべきである。人間の能力のちがいは、実に複雑なのである。能力が高いとか低いとかいう観念的なことではないのである。能力の種類が無限にあるといつた方がよい。だから一人一人の生徒についていえば、Aという生徒は国語に能力があり、Bは数学に、Cは英語にといふように、更に一つの教科の中でもっと細かく方向がちがうと考えるべきであろう。更に或る方向に能力があるといつても、その程度がまたちがう。この方向と程度から言つて、一人一人のプロフィールを描けば、千差万別である。そういう千差万別なのを育てるのである。しかもますますその個性を發揮するように育てるのである。決して一様にするのではない。

学級を編成しようがしまいが教育はちがった能力の人間をちがったままに育てて行くのである。そして能力のあるものをどしどしのばし個性を發揮させるのが目的である。学級を編成して五十人を一緒に教育するということはこの目的を左右するものでない。五十人の一人一人をのばすことを考えるべきである。それがぼんやりしたのは教育の意味がはっきりしなかったからであろうが、一方には人間の見方についても浅いものがあつたのであろう。人間のちがいの点よりも同じだという点が強くみとめられたからである。そこへもつて来て、一人の教師がこれを教育するという方法がそれに拍車をかけた。一人の教

師が教育するのは、何も五十人を五十把一からげにして扱うことを意味しないが、と行って今まで、五十人を教育するすぐれた方法が生み出されなかった。いな一斉に授業し、耳を揃えて話を聞く姿に、教育が進んでいるという錯覚をもち、約一世紀にわたつてのがれることが出来ない形におちこんだのである。

ここへおちこんだ大きな理由は、教育で最も活動するのは表むき教師である。その教師が重視され、そこへ目がむけられ、それを中心として学級が動くと考えられたからである。そういう教師を中心とする学級の動きが、教育であるとなつたか生徒一人一人のことが忘れ去られた。こうして三つのちがつたことが一つのこのようになり、学級を編成して、五十人を一括して、一斉に動かすこと、それは教師が活動することだというようになって来た。

所が考えてみると、教育されるものが、教育されるために何をしているかが問題になつていない。教師の話を聞いているというその形が教育を受けている形だと思ひこんでいたが、果たしてそうだろうか。教育の問題は何よりもまず教育されるものに焦点が合わせられなければならない。教育されるものが能力が高くなつて行くことである。その点からみれば教師は周辺存在である。生徒が動かなければ何にもならない。しかもそれは一人一人が動くということであり、学級として動いているということではない。教師を中心として学級が動いていくという形は、ともすると一人一人の動きを忘れさせてしまう。こうなるといかに教師が活動しようとも、生徒一人一人にとっては、教育を受けたことにならない。教師の活動について行けるものがどれ位いるか、その者は教育を受けることになつていようが、ついていけない者は実は動かないでいるわけである。それでは能力はのびて行かない。さてそれらの者が目立つて来ると、能力別の編成が考えられるが、依然として教育の方法がかわらなければ、また能力ののびないものが出るこ

になる。これは能力別の編成ということにまちがいはあるからである。編成することなく教育することが問題であるのに学級だけを編成しても、教育が行なわれないから効果があがらないことになる。

つまり学級の編成の仕方に問題があるのでなく、教育の仕方に問題があるのに、それがはつきり分化してないのである。それは一人の教師が学級にて働きかけるといふとこれまでの方法以外に方法が考えられないから、そういう地盤では、学級の人員の種類を考えると、いふ以外にない。と行ってその種類も、能力について高いか低いという上下の線での系列しか考えられない。人間の能力はその方向とスピードにおいてちがいがあつたのだという考え方ははつきりしていないから、能力別編成といつても、結局画一教育であり、十把一からげの教育であり、能力を育てる教育にはならないわけである。

## 五

以上のように考えて来ると、能力別編成ということが問題になつて来ている能力を問題にする方向だけは見当としてはまちがっていないが、それが学級の編成という点においてだけ考えられていて、能力を育てる教育の方法というものが考えられていないところが問題なのである。

そこでまず第一に確認しておかなくてはならぬことは「教育は能力別に行われることが原則である」ということである。これを別な言い方をすれば、学習は個別に成立するといつてもよい。この場合の学習というのは授業のことではない。行動の変容である。教育されて、それを身に受けとつた成果そのものである。その学習は、それぞれ個人個人のもつ能力において出発し、その能力においてそれぞれの行動をし、その行動にもとづいて即ちそれに応じて、学習という結果が起こつて来るのである。教師の話を聞こうが書物を読もうが、学習は、個

人個人が大脑を働かしてドゥーイングするところに成立する。考えることを通じて考えることが出来るようになるのである。自分でやることを通じてやれるようになるわけである。その考えたり、やったりすることは、またその本人がその時もっている力、能力でやるのである。能力以上のことも出来なければ、以下でもない。そういう所から一步つみあげて行くわけである。一人の教師が同じ話を五十人の学級の生徒に対してするから五十人が一斉におなじように学習を成立させていくのではない。一人一人の能力によってその受けとり方がちがうのである。つまり学習は個人の能力に応じて成立するのである。

そこで第二に、「教育は生徒が自己の全力をつくしてドゥーイングを行なうように場を構成することである」という原則を確認する必要がある。この点で特に考慮する必要のあることは、学習の一斉授業という形であろう。能力がちがうのが当り前であるから、五十人に同じように教師が働きかけて、一人一人が全力を出してドゥーイングすることは出来ない。どうしても教師の働きかけに感じきれない者が出て来るのである。そこでたとえばプログラム学習方式が主張するようなプログラムを与えて個々のペースでドゥーイングさせるという方式である。それが万能であるのではないが、そういうきめの細かい配慮が必要であろう。

こういう方式になると、能力別編成というような中途半端な方式は問題でなくなるということになる。例えばピアノの教則法のバイヤー（注バイエルと同じ）を思い浮べてみればよい。あのようなプログラムがあらゆる教科に出来る、それぞれの生徒は自己のペースで学習を成立させる場が与えられる。様々のプログラムがあると、それに対して早く進むものもあれば、なかなか進まない者もある。こうしてそれぞれが自己の能力の方向をも自覚して行くであろう。スピードのあるプログラムはどんどん進めばよい。おそいのはゆっくりやるべきであろう。こ

うしてそれぞれの生徒がそれぞれの個性において学習を成立させてゆく。これはもう能力別編成という如きものを超越してしまうことになる。学級はさまざまな方向においてさまざまなスピードの生徒の集まりということになる。一斉に歩調を揃えて進むものの集まりではなく、学級のあり方が根本的にかわるであろう。本当は現在の学習もそういう性格をもっているのである。それを学理に一連にあるものの如くに見ているのである。いわば学級概念のまちがいがあるのである。しかしこの方向をもっとおし進めると、学年編成などというものも考え方をかえなくてはならなくなるであろう、同じ年に生まれたものは、何年たつても同じように進んで行かなくてはならぬというのは、人の能力のありかたを考えるとおかしいことである。それぞれスピードのあるものはほとんど能力に応じて先へ進んでよい筈である。そうになると、学年とか学級とかは今のものとは全くちがったものとなるのである。何人かの生徒が一つのクラスをつくって共に行動することは教育として意味があることであるから当然考えられてよいが、それは、今のようなんでもかんでも同じように授業を受ける学級や学年ではないであろう。

能力別編成ということを検討して行くと最後に右のような考え方になって来るのではないか。そしてそれに向かつての具体的な方法もあらわれて来たから遠からずその方向へ進んで行くであろう。このような方向は、一方に科学に基づいた具体的な方法をもっていると共に、他方で人間に対する正しい理解を根底にしている。現在の能力別編成の根底には、人間の能力を上下の系列でしかながめず、結局人間に劣等感をしか与えないような教育を生み出している。「人間はその道によってかきこし」という考え方がなければ、教育は成立しない筈である。能力を発見し、引き出し、いつくしむことが教育ではないか。そういう人間観で本當の教育を成立させるのが、これからの人間能力の開発という方向であろう。

（国立教育研究所員）